Top Interview

「ともに生き、集うまち」「ともに考え、創るまち」新宿！

中山弘子 氏

新宿区長

**モダンな副都心でありながら、江戸の面影も多く残す新宿。
世界有数の繁華街「歌舞伎町」、23区内一の外国人人口、
増加するホームレス、多文化に挑戦する新宿区。
その先頭に立っている、就任2年余の中山弘子区長に、
21世紀の魅力ある新宿のまちづくりについてうかがう。**

聞き手　株式会社東京リーガルマインド代表取締役　反町勝夫

複合した多文化のまち・新宿

反町　新宿区には、商業地域もあれば高層ビルのビジネス街もあり、繁華街もあれば住宅地もあります。また、外国人、若い人も集まっています。そのようなさまざまな顔を持ちながら、バランスが取れていることが新宿区の魅力ではないかと思います。

中山　歴史的に見ても、新宿という場所は、内藤新宿という宿場から始まっていて、交通の結節点にあったわけです。交通の結節点には人が集まり、そして人が集まると何か楽しいことが始まる。それでまた人が集まる。そうした集客交歓都市の歴史が新宿にはあります。

また、外国人が多いのも確かです。現在、100カ国以上の国々から3万人もの外国人が新宿区に移り住んでいます。これを積極的にとらえて、多文化共生のまちづくりをしていきたいと私は考えています。

反町　われわれは、新宿区でも学校経営をしているのでよく分かるのですが、新宿区というのは東京の中でも一種独特のブランド力を持った区のように思えます。全国的に東京は、千代田区のイメージが強いですが、首都圏に住む私たちからは、圧倒的に新宿区です。若者は千代田区ではなく、新宿区に活気と若さ・魅力を感じています。何でもそろい、活気に溢れている。新宿区のこの魅力が、自然と人を集めるのでしょう。

中山　ありがとうございます。非常に多くの人が集まるのは、新宿駅の存在が大きいと言えます。1日の乗降客数350万人と、世界に冠たるマンモス駅で、これは桁外れの規模です。

また新宿区には、開放的で懐の深さみたいな魅力があり、それを誇りにも思っています。だから若者も惹かれてくるのではないでしょうか。大阪の吉本興業が、なかなか東京に進出できないとき、まず根付いたのはやはり新宿でした。私は「新宿は吉本をも飲み込むまち」と話をした記憶があるのですが、それだけ外からの文化を受け入れる度量が大きいまちなのだと思います。

反町　新宿駅西口には都庁をはじめ、超高層ビルのビジネス街があり、他のまちにはないモダンな商業集積の魅力があります。

中山　西新宿の高層ビル群は、新宿の風景のひとつとなりました。それまでは新宿駅東口を中心とした商業集積中心だったのですが、それに加えて業務集積ができたわけです。都庁が移転してきたことも大きかったですね。

さらに土地の利用度を見ますと、新宿区は決して商業・業務集積ばかりではなく、住宅地が全体の5割も占めています。四谷や神楽坂周辺、落合周辺などには、古くからの住宅地が今も残っています。また、ご存じの通り新宿御苑は、信州高遠藩の内藤氏のお屋敷があった場所ですし、その他、神楽坂周辺にも江戸時代の歴史を残す場所が数多くあります。そのようないろいろな特徴を複合的に持つところが新宿区の魅力なのだと思います。

持続的に発展するために

反町　新宿区の区長になられて2年、新宿が抱える課題についてはどのように取り組

まれていらっしゃいますか。

中山　課題は二点あります。一つは少子高齢化対策。もう一つはまちづくりです。

少子高齢化の現状を申しますと、新宿区は東京都でも先頭を走っています。23区の高齢化率（65歳以上の人口）の平均が17%なのですが、新宿は19%です。20%を超えると超高齢社会と言われますが、もうその目前です。また、新宿区は14万世帯のうちの58%が単身世帯で、そのうちの25%が高齢単身世帯です。転入・転出者も1割を占めています。そのため、合計特殊出生率※1（平成15年）は東京都1.00に対し、新宿区は0.79という低さなのです。従来から東京都の平均に比べて低く、なかなか出生率は上がりません。

反町　新宿の魅力がかえって、少子化と高齢化を招いているとも言えますね。そうした課題に対して、どのような対策を講じられているのでしょうか。

中山　これまではどちらかというと「悪い点、問題点を見付けて修正していく」というのが行政のやり方だったのですが、私は行政の方針として、「よい点を見付け、それを強化していく」ことに、力を入れていきたいと考えています。

そこで区長就任後、最初の施策として「子育て支援をどう行うか」を取り上げました。これから新宿区の持続的な発展を図るには、もっと多くの子どもたちが、ここで生まれ、すくすくと育っていくことができる環境をつくることが必要です。

平成15年7月に、国が「次世代育成対策推進法※2」という法律を制定しました。これは、わが国の急速な少子化の進行に対処すべく、国・自治体・事業主・国民が協力して、次世代の社会を担う子どもの育成を図るという法律です。各自治体は、平成17年度から行動計画を策定する義務を負うのですが、その中でモデルになる先行自治体について、わずか270万円ではありますが、調査費を出しましょう、ということでしたので、私はそれに手を挙げました。その計画は「次世代育成支援計画」というもので、有識者の意見や住民の意見も取り入れながら、現在大急ぎで進めています。

反町　このような計画は、区民との緊密なコミュニケーションがないと実現できません。区民が参画できる仕掛けが重要です。

中山　その通りです。私は区政のキーワードのひとつに「協働」を上げています。区民、事業者、在勤者、さまざまな意見を持つ人々と協力して、区政を実現していく。そのためには住民側の参加する人にも、行政側と同じ情報量を共有してもらわねばなりません。

この「次世代育成支援計画」では、「子育てコミュニティタウン新宿」を目指し、対話集会、出前懇談会をはじめ、パブリック・コメントを募集するなど住民の意見を広く募りました。計画の取り組みのひとつは、「子育てと仕事の両立」です。特に保育園に入園させたくても預けられない、いわゆる待機児童の解消については、大変力を入れており、平成19年4月には、すべて解消させたいと考えています。

反町　待機児童ゼロは、大きな都市においては、どこも難題です。特に東京都には、潜在的に働く意欲の高い母親が多いですから、保育園の開設が進むにつれ、さらに保育を望む保護者がどんどん増えてきます。

中山　その通りです。また、同時に家庭における子育ての負担感をどのように取り除いていくか、ということも必要です。負担感は、経済的な面だけではなく、心理的な面も大きく、家庭で母親と子どもだけで孤独な育児に埋没している状況が大変深刻で、健全な子育てをどうするかという迷いが母親にあります。そこで家庭や地域の子育て力・教育力をアップする施策を考えています。

これまでも親が病気にかかったときの一時保育というのは、よく知られていますが、さらに、例えば親が映画を見に行きたいとか、ちょっと一息つきたいとか、どのような理由であっても、子どもを一時保育で預けられるような施策を、この計画の中で体系的に盛り込むことになっています。

さらに子育て支援というと、小さい子どもの子育てへのサポートというイメージですが、私はさらに進めて、子育てとは「子どもが将来、自分の力で稼いで生きていく、自立していく」という段階まで考えるべきだと思

※1　合計特殊出生率：厚生労働省が「人口動態統計月報年計（概数）の概況」において示している数値で、女性1人が一生の間に産むと考えられる子どもの平均人数。ある年における15～49歳の女性の年齢別出生率を合計して算出する。この数値が人口置換水準とされる2.08を下回ると、現在の人口を将来維持することができない。

※2　次世代育成支援対策推進法：平成15年7月16日公布、同日施行。急速な少子化の進行、家庭および地域を取り巻く環境の変化に鑑み、次世代育成支援対策の基本理念を定め、国、地方公共団体、事業主および国民の責務を明記している。

うのです。そのような意味で、今課題となってきているのは「ニートの問題」です。ニートとは、若者で、就業も在学もしておらず、働く意欲がない点で、失業者でもない人達を言います。今回の計画では、ニートについての施策は、その芽は出ていますが、十分ではありません。

反町　ニートの問題は、国が予算を付けて押し進めている「若者自立・挑戦プラン」や通称「ジョブカフェ」で取り扱っていますが、自治体が担当しています。フリーターよりも働く意欲がない点で、深刻です。

中山　ニートの若者を、ジョブカフェに参加させることができるように、なるべく早く対策を打つことが重要だと思います。子育てについては、次世代育成支援計画を策定することで、かなり具体的なかたちになってきたと思います。あとはこれをどのようにして効果的に推進していくかというところです。

高齢者対策のポイント

反町　高齢者に対する施策はどのようなものでしょうか。

中山　高齢者については、介護保険制度ができたことで要介護高齢者施策の枠組みは整ったと思います。しかし、ご存じのようにサービスに要する費用が非常に高くなってきていますので、これを持続可能な制度としていくための制度見直しが大きな課題となっているのはご存じの通りです。それと合わせて、「元気高齢者の社会参加」を促進する施策をどのようにして具体的に行うかが課題であると考えています。

特に協働を施策としている新宿区政では、その担い手は元気な高齢者です。これから団塊の世代が、地域に戻ってくるわけですから、これは大変な資源です。元気な高齢者が、サービスの受け手から社会の担い手として、地域に参加する仕組みをつくることはとても大事ではないかと思います。

反町　私どもは大学経営もやっていますが、一流商社でポイントの大きい経験のある方、一流企業で社長などを経験したOBの方などに、講義をお願いしています。その方たちは、今の日本の繁栄をつくり上げた優秀な人たちです。今、曲がり角にある日本の将来を担う若者にとって、このような先輩の話こそ、何ものにも替え難い講義のはずです。大学側と講師がカリキュラムの相談をして、例えば「ブラジルの経済」とか「イギリスの教育」というような誰も知らないテーマについて、大変興味ある講義をやっていらっしゃいます。世界の現状を、生の情報をもとに、きちんと話せる人は、この人たちをおいて、他にいません。このように高齢者の見識を活かす方法はいくらでもあると思います。

中山　それは素晴らしいことです。これからは、誰もが、社会の構成員として長く働き、世の中に貢献し、そこに生き甲斐を持つ時代です。そのためには働き方も、従来のようにフルタイムの常勤で、年功序列などという画一化したシステムだけでは、社会がもちません。ところがそれに換わる新しい枠組みが、未だつくられていないのが現状です。そこで新宿区では、高齢者への仕事の斡旋を社会福祉協議会などに委託しながらやっています。今後は、ボランティアなどについても、柔軟に行おうと思っています。

また、区にもいろいろな審議会があるのですが、そのメンバーの区民委員になる人について、公募の枠を設けています。私は、都市に住んでいる高齢者の中には、行政が必要とする能力を持った方が大勢いらっしゃると思っています。審議会の初回では、私から趣旨説明をし、審議委員から自己紹介をするのですが、先日もやはり公募で来た方で、「長い間の海外勤務で、仕事人間でしたが、この年になって地域のことに関心が出てきたので何か力になりたい」という方がいらっしゃいました。

反町　静岡市の小嶋善吉市長は、やはりさまざまな審議会に市民を公募され、継続的に市政のテーマについての研究や調査をされています。そして審議会に諮らねばならない市政のテーマが生じた際には、この市民を含めた審議会に諮り、実のある、効率的・専門的な運営を進めていらっしゃるようです。多様な市民の意見を吸い上げるためにも、また高齢者の社会参加を推進するためにも、このような制度はこれからの地方自治には大変有意義な発想ではないかと思います。

歌舞伎町ルネッサンスの文化を

反町　「まちづくり」の課題については、どのような施策をお考えでいらっしゃいますか。

中山　「安全、安心、快適で、文化の薫るまちづくり」などと、言葉で言うと非常にありふれているのですが、その具体化を考えたときに、私は「まちのグランドデザインをみんなで共有化したい」と考えています。

新宿区のまちは、昭和39年の東京オリンピックのときに立ち上げた施設が多いことから、まち全体の建物が更新の時期を迎えています。そこで建物の所有者がそれぞれ勝手に更新してしまうと、まち全体の構成が、ちぐはぐになってしまいます。

そこで区民、事業者の方も含めて、意見を交換し、情報を共有化しようという試みで、1年前から「まちづくり懇談会」を立ち上げ、まちのグランドデザインをつくろうと有識者の意見を聞いているところです。

反町　新宿のような巨大なまちでは、秩序とバランスのあるまちづくりのために、そのような利害関係者の意見を踏まえたグランドデザインをつくることは、何よりも大事なことだと思います。しかし、同時に、現在進行形の具体的なまちづくりの課題や施策もあるのではないかと思いますが。

中山　すぐに取り組まなければいけないまちづくりの課題として、私は3つのテーマを考えています。一つ目は歌舞伎町対策。二つ目は外国人の問題。三つ目がホームレスの問題です。

まず歌舞伎町問題では、従来は「犯罪インフラの除去と環境浄化」が大きな課題でした。ちょうど東京都迷惑防止条例などもできたので、これで取り締まるべきものは、取り締まっていただくのは当然です。さらに新宿区としては、平成16年6月から、「歌舞伎町クリーン作戦」を実施して、路上の看板などの取り締まりをしています。これにより、今は随分ときれいになっています。区としては、歌舞伎町は、単に犯罪防止、環境浄化を目的にするだけでなく、さらにニューヨー

クのタイムズスクエアのように、自分たちでお金をかけて環境美化から開発までを行う、区民が一体となった、エリアになればいいと考えています。そこで近々「歌舞伎町ルネッサンス推進協議会」を立ち上げる予定です。

なぜルネッサンスかと申しますと、歌舞伎町はもともと、戦後「日本一の文化的繁華街をつくろう」と、まちの人たちがつくった地域なのです。それで博覧会を開催したり、画廊を開いたり、それで失敗して借金を背負ったりしながらつくり上げてきたまちが、今、風俗と組織暴力で危険な側面をも持つまちになってしまいました。そこで「文化の風をもう一度」という願いを込めて、ルネッサンスと呼んでいます。劇場街が、再生の時期にもなっていますし、住民、区、警察、都が一緒になって国にも応援していただき、歌舞伎町の再生に取り組んでいきたいと思います。

外国人は区民と共生、ホームレスは自立生活の体制を

反町　外国人問題について、歌舞伎町には多くの外国人がいますが、その子どもは、保育園で預かってもらえるのでしょうか。

中山　もちろんです。区の保育園できちんとケアしています。外国人に対しては、多文化共生社会ということで、共生できる社会づくりを進めています。例えば、幼稚園や小学校に外国人の子どもが入学したときには、言葉を習得してもらうために、日本語を教える体制をとり、通常の授業に臨めるようにしています。保育園では、そうはいきませんが、保育士さんたちが勉強してやってくれているので、子どもはどんどん日本語を覚えているようです。

今、新宿区ではさまざまな生活情報を4カ国語で提供しています。ハングル、中国語、英語、そして日本語ルビ付きの4カ国語なのですが、漢字にひらがなでルビを振ると読める外国人が大勢いるのです。それで日本語にひらがなのルビ付きで、情報提供しているわけです。

反町　ホームレス対策については、具体的にどのようなことをされていらっしゃいますか。

中山　公園等から立ち退かせても、必ず他へ出て行くわけですから、解決にはなりません。基本は入所できる施設を用意し、相談できる体制や就職情報などの情報提供をし、自立後は地域のアパートなどに移ってもらうという施策をとっています。アパートに移った後も、再び自立できない状況になってしまった場合は、最終的には生活保護に頼らざるを得なくなってしまうわけで、そうなると社会全体にとって大きな負担になるだけでなく、本人にとってもよくない結果となります。そこでNPOやケースワーカー

の団体などに委託をして、定期的に巡回して相談するような事業も行っています。しかし、それでも今のようなホームレスの状況にあるわけです。

反町　結局ホームレス対策が進んだところに集まってくるわけですから、一つの区だけでは根本的な解決にはなりません。現状は、新宿の対策がよくなされていると考えてよいのではないでしょうか。新宿はホームレスの人たちにとっても、それだけ住みやすいところであるという、あかしでもあるわけです。

中山　そうなのです。ホームレスは全国から新宿に集まって来ます。そこで23区と東京都が一体的な事業として、ホームレス対策を行っています。昨年夏からは、東京都が公園にいるホームレスの人たちに仕事と住まいを提供して、公園から出て行ってもらう事業を始めました。費用については、23区と都がどう配分するかは現在話し合い中ですが、それで既に200人以上のホームレスに公園から退去してもらい、地域のアパートに移ってもらっています。新宿区の場合、区立中央公園や都立戸山公園は、ホームレスのブルーテントがいっぱいになっていましたから。

歩くことで歴史と文化に触れるまちに

反町　中山区政では、先ほど「プラスイメージのものをより大きくする」というお話がありました。そのような意味で、特に今、取り組まれている施策があれば、具体的に教えていただけますか。

中山　新宿はまち全体が観光資源だと思っています。ですから観光都市新宿を目指していきたいと思っています。「住んでよし、訪れてよし」で、リピーターに来てもらいたい観光都市ですが、歌舞伎町は外国人向けの観光ガイドブックなどでは、有名な観光名所となっています。また、神楽坂では、今、まち歩きが盛んに行われています。ちょっと足を踏み入れると黒塀や石畳があったり、そこから早稲田に抜けると、夏目漱石の終焉の地である漱石公園があったりと、歩きながら歴史を知る、いい観光コースとなります。ウォーキングは健康増進に役立つだけでなく、区内の歴史・文化に触れることができる最適の手段です。そうした散策コースの整備を始めております。しかし、未だ十分に知られているというわけではありません。

反町　新宿の地場の産業を絡めて、地元産業と観光ルートの連携という考えはありませんか。

中山　その通りで、今、新たに観光ルートづくりを始めているものがあります。新宿の地場産業というと、驚かれるかもしれませんが、染色と印刷・製本なのです。印刷・製本はお分かりになるかもかも知れませんが、染色に関しては、「染めの王国・新宿」と言われるほどで、京都、金沢に次ぐ、日本の三大産地なのです。

おそらく大正時代の大震災の後だと思いますが、神田川と妙正寺川の水を求めて、そうした染色業者が移り住んでおります。特に神田川沿いの早稲田、落合のあたりに染色作家などが多く、そうした「染めのルート」を観光ルートにしていきたいと考えています。

反町　そのような伝統的な産業は、区で指定してサポートしていかないと消えてしまうので、京都などが行っていますが、そこに観光ルートをつくっていくというアイデアはいいですね。

中山　うれしいのは、そこの地元の若い人たちが、自分たちで「落合ウォークラリー」と銘打って、地元住民や飲食店などの参加を得て、イベントを始めました。着物姿の皆さんが地元の人と一緒に染色工場などを歩き、お腹が空くと、地元のそば屋さんやカフェ等と連携して食事ができるようにしています。私も昨年秋に見学に行ってみたのですが、随分と多くのお客さんがいらっしゃって、江戸小紋・更紗などの本物の染色が見られるようになっています。

反町　確かに新宿はそうした江戸時代の民衆文化が、まだまだ残っていますね。

中山　ええ、しかも地形的には新宿は、武蔵野台地が張り出してきている、その先端部分に位置します。ですから高台もあるし、斜面緑地もあり、神田川、妙正寺川が流れる地域もある。私は新宿のまちは「水辺と緑のリングに囲まれたまち」と表現しています。妙正寺川、神田川、そして外堀につながって、明治神宮外苑の緑、御苑の緑、そして新宿中央公園につながっていくという、まさに水辺と緑のリングに囲まれているわけです。

実は区民の意識調査をしたときに、新宿をイメージする色を尋ねたところ、「灰色」という答えが多く、がっかりしました。しかし、そのように否定的にとらえず、プラスイメージにとらえて、「水辺と緑に囲まれたまち」なのだという事実を思い起こし、環境整備に向け、住民の意識も変革して、協働し共生できる新宿区にしていきたいと思っています。

反町　区長のおっしゃる「プラスイメージを大きく」するという考え方は、歌舞伎町の対策においては、文化の風を再び吹かせるというかたちで現れていましたし、外国人問題も、積極的に共生する姿勢に見ることができました。

加えて観光都市づくりにも取り組まれ、集客交歓都市という歴史的な新宿のプラス面を伸ばす区政のグランドデザインがよく分かりました。このようなプラス思考は、おそらくこれからの地方分権の一つの指針になるものと思います。

本日はお忙しいところ、貴重なお話をいただき誠にありがとうございました。

新宿区長
中山 弘子（なかやま ひろこ）

1945年群馬県生まれ。1967年3月日本女子大学文学部社会福祉学科卒業。同年4月東京都労働局亀戸労政事務所入都。1980年8月中野区中野福祉作業所長。1984年4月同児童青少年部婦人青少年課長。1987年6月東京都港湾局開発部開発調整課長。1989年8月同衛生研究所事務部長。1992年7月同港湾局参事（海面処分場整備推進担当）。1995年6月同生活文化局消費者部長。1997年7月同清掃局作業部長。1999年6月同人事委員会事務局長。2001年7月同監査事務局長。2002年10月東京都退職。同年11月新宿区長就任（1期目／現職）。

［記事の参考ホームページ］
新宿区ホームページ
http://www.city.shinjuku.tokyo.jp/

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。
h-bunka@lec-jp.com